

福島第一原発トリチウム水

6月25日に福島第一原発を視察したあと、あの膨大な数の汚染水のタンクのことが気になっていた。大阪市立中央図書館で「福島民報」8月20日を手にとると、標題の記事があった。地元だけあり、やはり詳しい。

リードから一東京電力福島第一原発で汚染水を浄化した後に残る放射性物質トリチウムを含んだ水に、他の放射性物質が除去しきれないまま残留していることが19日、分かった。一部の測定結果は排水の法令基準値を上回っており、放射性物質の量が半分になる半減期が約1570万年の長寿命のものも含まれている。

第一原発でたまり続けるトリチウム水を巡っては、人体への影響は小さいなどとして、処分に向けた議論が政府の小委員会でも本格化し、今月末には国民の意見を聞く公聴会が開かれる。

東電によると、2017（平成29）年度に汚染水を多核種除去設備（ALPS）で浄化した後に測定した結果、半減期が約1570万年のヨウ素129が1㍈当たり最大62.2ベクレル検出され、法令基準値の同9ベクレルを上回っていた。このほか、半減期約370日のルテニウム106（基準値100ベクレル）が最大92.5ベクレル、約21万1千年のテクネチウム99（同千ベクレル）が最大59.0ベクレル検出された。

トリチウム水の処分方法は、政府の作業部会が海洋放出や地層注入など5つの選択肢を整理。風評被害などを議論する政府の小委員会で、処分方法の絞り込みを検討し、海洋放出や大気放出は社会的影響が続く期間が比較的短いなどの利点を示している。原子力規制委員会の更田豊志委員長は「唯一の方法」として早期の海洋放出を求めている。

これまで東電は多核種除去設備（ALPS）で「トリチウム以外は除去できている」と繰り返し強調してきた。原子力規制庁は「関係者の安心につながる丁寧な対応が必要だ」と指摘する。……

海洋放出の場合、トリチウムの濃度が基準値の1㍈当たり6万ベクレルを下回るよう、タンクのトリチウム水を数倍～数十倍に薄めて処分する方法が想定される。ただ、東電はタンクごとの放射性物質の濃度を把握しておらず、全ての放射性物質が基準値を下回るのかも不明で、再度の浄化を迫られる可能性もある。



(2018年8月28日)